

諏訪湖オルゴール博物館「奏鳴館」

—アンティークが120台—

(財)中部産業・地域活性化センター

客員研究員 青山 征人

新しい観光のあり方“産業観光”が、中部圏において積極的に進められています。“産業観光”は、産業の内容を対象とする観光で、生活の中の商品・サービスが提供されるまでに、どのような歴史や技術があるのかを発見し、体験する知的好奇心にあふれた観光です。

具体的には、製造業の工場見学や、伝統産業の体験プログラム、企業博物館などがあげられます。こうした施設を訪ねる機会は、従来から社会見学や企業視察などがありましたが、特定の団体や目的に限らず、個人客や家族客などの一般観光客でも楽しめるよう門戸を広く開放していこうとするところに“産業観光”の特徴があります。

今回は、長野県諏訪郡下諏訪町の「奏鳴館」を紹介します。

(資料1)



諏訪湖オルゴール博物館「奏鳴館」

奏鳴館は諏訪大社の鳥居前

諏訪湖オルゴール博物館「奏鳴（そうめい）館」は、1996年長野県諏訪郡下諏訪町の諏訪大社下社・秋宮前にオープンした。オルゴール生産では世界一のシェアを誇る三協精機製作所（現日本電産サンキョー）が欧米で買い集めたアンティークオルゴールに、自社製品を加えた120点を提供し、公

開している。下諏訪町の町おこし事業「湯の里浪漫事業」の目玉として計画され、奏鳴館の建物は、大正ロマンあふれる、下諏訪町の旧役場庁舎を復元した（資料1）。道路を挟んで、反対側には時計の博物館「儀象（ぎしょう）堂」や歴史民俗資料館がある。この一帯は門前町であると同時に、旧中山道と旧甲州街道が交差する旧「下諏訪宿」。かつては殷賑を極め、大名が宿泊した旧本陣や温

泉旅館街に今も当時の風情を色濃く残す。

この諏訪大社では、2010年4月に、天下の奇祭といわれる御柱祭（おんばしらさい）が行われる（資料2）。6年に1度、十二支の寅と申の年に、上社、下社合わせて4社の宝殿を建て替える行事であり、ことに山から10トン近い巨木を切り出し、急斜面を滑り落とす「木落し」は祭り最大の呼び物。土ほこりをあげ、猛然と坂を突き進む御柱にまたがった若衆が振り落とされまいと必死にしがみつく様は勇壮そのもので、諏訪地方の住民22万人が酔いしれる。国内はもとより海外からの観光客も多い。

オルゴールの起源は教会の鐘

オルゴールという言葉は和製オランダ語であり、英語ではMUSIC BOXと呼ぶ。オランダ語のオルゲル（ORGEL オルガンの意味）がなまったもので、手回しやゼンマイ仕掛けで、シリンダー（円筒）に打ち込まれたピンまたはディスク（円盤）に設けられた突起が音楽信号となり、細長い鋼鉄製のくし歯を弾いて音楽を奏でる装置をいう。欧州では14世紀以来の歴史を持つ古い自動演奏装置だったが、1877年に米国のエジソンが蓄音機を発明したことで決定的な転機を迎え、その後はラジオやオーディオ機器に主役の座を譲った。日本には16世紀にオランダ貿易を通じてもたらされ、歌川芳藤が1853年（嘉永6年）に描いた浮世絵にも

（資料2）



諏訪大社の御柱祭は勇壮そのもの。
（諏訪地方観光連盟提供）

「チャルゴロの図」（那須オルゴール美術館蔵）として登場する。

オルゴールの起源は、欧州の教会にみられるカリヨン(多数の鐘を音律に従って配列し機械で打ち鳴らし、時報を知らせる)付きタワー時計にさかのぼる。最古のものは1352年にフランス・ストラズブルグの教会に、また1381年にはベルギー・ブリュッセルの聖ニコラス教会に最初の自動演奏装置付カリヨンが取り付けられた。その後大きな釣鐘は、ゼンマイの発明による時計の小型化とともに、小さなベル、さらにはくし歯へと進化。1796年にはスイスの時計職人アントワーヌ・ファーブルが円筒型のシリンダーオルゴールを開発する。ゼンマイでシリンダーが回転し、シリンダーに打ち込まれた直径0.2～0.3mmのピンがくし歯を弾くことによって音楽を奏でる方式だ。また1886年にはドイツのパウル・ロッホマンが、ディスクの裏面に突起を設け、表面からパンチで突くことにより奏でる、ディスクオルゴールを開発。ディスクを交換することで多くの曲を聴きたいという人々の願いに応えた。シリンダー式は何千本ものピンを手作業で打ち込むため高価となり、ブルジョア階級のステータスとしてもはやされた。その後発明されたディスク式は産業革命後のドイツで主に生産され、大型でお金を入れたら鳴る方式はレストランやパブで、小型のものは家庭で利用された。19世紀初頭にはスイスのペイロード社やフレール社などが創業し、同後半になるとドイツのシンフォニオン社、ポリフォン社、スイスのリュージュ社、米国のレジーナ社などが相次いで進出、激しい技術競争、シェア争いを展開した。しかしエジソン以降、ベルリーナの発明による円盤型蓄音機が登場すると、声の再生など領域が拡大することで人気を呼び、オルゴールはその使命を蓄音機に譲ることになった。

旧三協精機が圧倒的強さを発揮

1914年に勃発した第一次世界大戦を契機に、大きな豪華家具調オルゴールを作っていたメーカー

は次々姿を消し、それに替ってシリンダー式の小型のものがおもちゃやギフト商品としてもはやされるようになった。わが国でオルゴールが本格生産されるのは第二次世界大戦後のこと。キット（バルブ専業最大手）の前身、北沢バルブを退社した山田正彦、六一兄弟と北沢の同系列である東洋バルブで技術者として勤務していた小川憲二郎の3人が1946年に三協精機製作所を立ち上げた。最初、電気の使用量を計る積算電力計を細々と生産していたが、翌47年に静岡市にあった富士時計という会社から「オルゴールを作ってみないか」という誘いがあったことがきっかけとなって、同部門の開発に乗り出した。オルゴールと時計は、フレーム、ドラムを回転させるゼンマイ、これらを取る香箱、各種ギアなど似たような部品が多く、諏訪の精密機械技術を応用すれば可能と判断した。スイス製品を徹底的にコピーすることから出発し、試作1号機を6台作り上げたが、4台は次々くし歯が折れ、残った2台はそれぞれ「バケツの底をたたくような音」の失敗作であったと伝えられている。改良に苦心を重ね、48年には500台を初出荷するまでにこぎつけた。販売が軌道に乗ったのは朝鮮動乱後のこと。帰還する米兵達のあいだで、オルゴールを仕込んだ箱根細工の箱が土産品として人気を呼び、それに目を付けた米国のバイヤーが箱の中のムーブメントの刻印「SankyoJAPAN」を頼りに住所も書かないまま、注文を寄せたのである。その手紙は、宛名は同じSankyoでも三協精機ではなく、製菓の三共（現第一三共）に届く。何度も届くオルゴールの注文に首をかしげた三共の女子社員が機転を利かし、諏訪の零細企業である三協精機を探し当て、送り届けてくれたことがオルゴールの大量輸出につながったという。専用工作機械や完全自動化ラインの開発によって80年代には1秒間に1台生産するまでに効率をあげて、年間1億台を生産する能力を持ち、世界市場の90%以上を押さえるようになった。オルゴールの量産に成功した同社は、蓄積技術を生かして8mm撮影機やテープレコーダ、オーディオ用磁気ヘッド、タイムスイッチ、マイ

クロモータ、工業用ロボットなど多角化を進めたが、業界の競争激化、円高による輸出不振などで体力を消耗し、赤字転落を余儀なくされた。2002年にはオルゴール部門を子会社に移管し、03年には日本電産(社長永守重信氏)の傘下に入って、モーターを中心とする電子部品とシステム機器に特化する。

風土が育てた諏訪のモノづくり

諏訪地域というのは、諏訪湖を中心にして岡谷市、下諏訪町、諏訪市、茅野市、原村、富士見町の3市2町1村を指す。面積の多くは八ヶ岳連峰、霧ヶ峰高原など南アルプスの山岳地帯で、わずかな盆地も主要部分は諏訪湖（13.3km²）が居座る、冬厳しい地域。生活するには決して条件のよい土地ではないが、そんな風土こそ勤勉で独立心旺盛な諏訪人気質を育んだといえる。古くは旧石器時代から人が住みつき、縄文文化を育てたし、江戸から明治にかけては養蚕と生糸生産で日本一になる。生糸生産は、わが国の主力産業として、最盛期には国内生糸の4分の1を占め、今の自動車、エレクトロニクス並に外貨獲得に貢献し、その生産課程でバルブ、ポンプ、製糸機械など生産にまつわる産業機械を育てた。この蓄積の上に、セイコーエプソンの前身である第二精工舎や帝国ピストンリングなどの戦時疎開により計器、信管、レンズなど精密技術が加わったことが、諏訪のモノづくりに厚みをもたせ、人材を育てた。戦後、スピアウトした人たちがヤシカ（京セラに吸収）、三協精機、チノン（コダックに吸収）などを立ち上げ、部品メーカーを育てた。残念ながら業界内の競争激化や、8mm撮影機、カメラのように需要そのものが減少したため経営主体が変わったものもあるが、その高い技術力は脈々と受け継がれている。

産業観光の中核は奏鳴館と儀象堂

オルゴールと時計という世界のトップシェアを誇った諏訪の精密工業が収集し、開発した製品を

展示するのが奏鳴館と儀象堂。ともに諏訪大社下社の門前にあり、アンティークから現代までのオルゴールと時計の歴史及び技術を目の当たりにできるほか、自分だけのオリジナル製品を組み立てられる体験工房を備えている。

奏鳴館は、木造2階建てで、1階がオルゴールの過去から現在までを分かりやすく紹介し、2階は演奏を主体とするようにレイアウトされているが、どちらもフロア面積がそんなに広くない上、展示物そのものが本箱か大型テレビほどの大きさのため手狭な印象を受ける。主なものを列記する。

1階

●キャピタル・カフボックス

米国・オットー社が1894年頃制作した高級品。外観はシリンダーオルゴールに似ているが、「カノ」と呼ばれる円筒に突起があり、ディスクと同じ構造。動力は圧縮したコイルばねを利用する。81弁で10曲演奏する。

●インターチェンジブル

スイス・プレモン社が1880年代に開発。1つのシリンダーに6曲が入り、それが6本付き、合計36曲を聴くことができる高級品（資料3）。

●ザ・ビクトリア

1845年頃スイス・ジュネーブで制作。鉄道駅に置

(資料3)



シリンダー4本が納められており、交換することで24曲を聴くことができる、インターチェンジブル。

かれたシアター付きで、3体の人形が曲に合わせて踊る。

●レジーナフォン

1900年頃米国・レジーナ社が開発したオルゴールと蓄音機の兼用機。珍品オルゴールから蓄音機に移行する過渡期の製品。ラッパとターンテーブルは取り外しができる（資料4）。

(資料4)



米国で開発されたオルゴールと蓄音機の兼用。

2階

●ポリフォンStyle No・54

ドイツ・ポリフォン社が1895年頃制作。サリバン&ギルバート作曲のオペラにちなんで愛称「ミカド」と呼ばれ、ヨーロッパ王室に好まれたが、第一次世界大戦を境に作られなくなった（資料5）。

(資料5)



「ミカド」の愛称がつけられたポリフォン社製ディスクオルゴール。欧州の王室に好まれた。

●シンフォニオンStyle No・100

ドイツ・シンフォニオン社が1900年頃制作。ディスクオルゴールを最初に開発した会社であり、展示品はオートチェンジャーを最初に手がけた一品で、現存するのはこれだけ。12枚のディスクを収納し、ケース正面で聴きたい曲の番号に合わせて、お金を入れれば演奏する（資料6）。

(資料6)



12枚のディスクを収納し、お金を入れれば演奏する。
ドイツ・シンフォニオン社。

●ストリートオルガン

大道芸人が観客集めに演奏し、それに合わせて芸を披露するなど現在でも活躍する。展示機種はドライカ社(ドイツ)製の現代モノ。穴のあいたロールペーパーをセットしハンドルを回して演奏する。奏鳴館では観客に実演させてくれる（資料7）。

(資料7)



辻音楽師が使ったストリートオルガン。

●オルフェウス奏鳴館オリジナルキャビネット

1996年に三協精機が作った電動式80弁・16インチのディスクオルゴール。山崎館長自身、開発、設計を担当した（資料8）。

(資料8)



三協精機が総力をあげて100年前のデスクオルゴールを再現したオルフェウス。山崎氏も設計に加わった。

一方、儀象堂は、精工舎が生産した歴代の時計に、江戸時代の大名時計や外国製品などを加えた、400台にもものぼる時計博物館。館内は時の仕組みを分かりやすく学べるように配慮されているが、圧巻は中国で900年前の北宋時代に作られたという、水力で動く天文観測時計塔「水運儀象台」の復元機。高さ12m、土台の底辺長さ6mの木閣と呼ばれる箱の中に水車を設置し、水車を規則正しく回転させて時を告げるとともに、星や太陽のうごきを観測して1年の長さを測る天文台の機能を併せ持つ装置。時計の歯車やゼンマイに当たる部分を木で作り、162体の人形が時を告げ、鐘を鳴らす精巧なもので、一日の誤差は2分以内という正確さ。精工舎が、中国の「新儀象法要」という当時の設計書を解説したのを下諏訪町が聞きつけ、産業観光の一つとして復元した。北宋は北から攻めてきた金に滅ぼされ、儀象台も残っていないため、時々中国からの見学者があるという（資料9）。

(資料9)



中国の900年前の時計を復元した水運儀象台。
大きすぎてカメラに入りきらなかった。

広域観光を推進

諏訪地域は、広大な長野県全体からみればほんの小さな地域。特に諏訪湖に面した岡谷市、下諏訪町、諏訪市の2市1町は隣接しており、境界さえはっきりしない位の接しぶりで、クルマで1時間もかければ一周できるほど。このため観光行政についても各自治体がそれぞれ観光振興計画を策定し、それぞれが博物館など施設を設置していたが、最近になって諏訪圏全体の観光振興を進める機運が盛り上がってきた。各自治体の横断的組織である諏訪地方観光連盟を立ち上げ、観光アクションプランを策定し、諏訪地域全体の認知度向上やリピーター確保に向けた事業を展開している。来年4月から5月にかけては諏訪大社上社・本宮（諏訪市）、同前宮（茅野市）、下社・春宮、秋宮（ともに下諏訪町）4社の御柱祭が、秋には諏訪地域全域の神社が参加する「小宮の御柱」が行われる。6年に1度のチャンスを生かし、岡谷市、下諏訪町の進める産業観光、さらには霧ヶ峰高原に代表される自然景観、上諏訪、下諏訪の温泉施設をうまく組み合わせることによって、諏訪単独の滞在型観光地として発展することを計画している。

参考文献

- (1988)：「長野県史・第7巻」（長野県）
- (1995)：「アンティーク・オルゴール物語」（新潮社）
- (1997)：「長野県の歴史」（山川出版社）
- (2003)：「信州独創の軌跡」（信濃毎日新聞社）
- (2007)：「諏訪マジカルヒストリーツアー」（長野日報社）

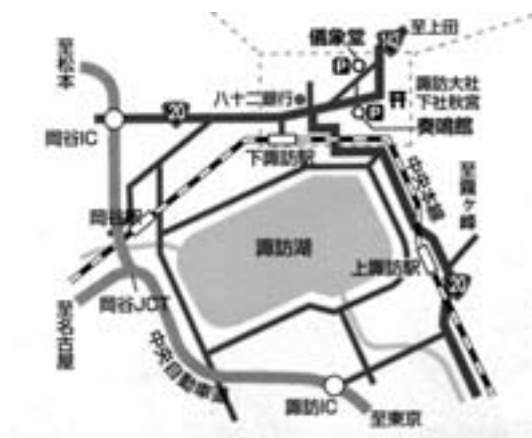
諏訪湖オルゴール博物館奏鳴館の概要

| | |
|------|-----------------------------|
| 住所 | 〒393-8503 長野県諏訪郡下諏訪町5805 |
| TEL | 0266-26-7300 |
| FAX | 0266-26-1044 |
| URL | http://www.someikan.com/ |
| 開館時間 | 9:00～17:30（12月～2月は17時） |
| 休館日 | 年中無休 |
| 入場料 | 大人800円、小中学生400円 （団体割引あり） |

アクセス

- JR：中央本線下諏訪駅下車、徒歩10分
- 自動車：中央自動車道諏訪ICから25分
長野自動車道岡谷ICから10分

案内図



インタビュー



奏鳴館・儀象堂館長代行
山崎 克弘 氏

一 下諏訪町にオルゴール博物館を作った理由はなんでですか。

当初は、旧三協精機（日本電産サンキョー）が作る予定だったが、企業の業績が悪くなり、単独では難しくなったことで、下諏訪町の施設としてオープンした。展示品のアンティークオルゴールは創業者の山田正彦、六一兄弟が主にヨーロッパで集めたもの。三協精機は3人で1946年に積算計や時計部品の生産を細々とはじめ、48年からオルゴールの開発に着手した。作ったのは現在のシリンダーオルゴール。事業が軌道に乗ったため初めて本場のヨーロッパを視察した時、驚いた。自分達で作っていた物とは比べられないほど大型のシリンダーオルゴールやディスクオルゴールがアンティークとして大切にされており、改めてオルゴールの歴史を実感した。収納する外箱も大小様々で、その上大変豪華。スイス、オランダ、ドイツなど各国、各地に博物館が多数あって、大切に保存されている。「よし、いつかは日本にも記念館を作ってやろう」と心に決め、集めだした。その後、会社の業績の低迷や株式の買占めなど不幸なことが続いて自社での記念館設置は諦めた。ちょうどそのとき下諏訪町が町おこし事業を模索しており、町が土地と建物を提供し、三協精機が展示物を無償提供する、運営は外部委託することでオープンの運びとなった。

一 不勉強かも知れないが、大型テレビか本箱のようなサイズのオルゴールの実物を見たのは初めてです。欧米での歴史は古いのですか。

元々は教会の鐘、カリオンから発達したもので、1300年代に登場したといわれている。スイスで円筒型のシリンダータイプ、ドイツで円盤型のディスクタイプが開発された。主に欧米で生産され、普及した。エジソンが蓄音機を発明するまでは、唯一の自動演奏楽器として、シリンダータイプはブルジョワのステータスとしてもはやされ、ディスクタイプの大型機種はレストランなど業務用に、小型機種は家庭用に広まった。当時、数百社あったオルゴールメーカーは「より美しい音色」、「高い音楽性」を求めて技術を競い合い、特許戦争は激烈だった。さらに豪華な装飾のキャビネットやオートマタ（カラクリ人形）、音色以外のベル、鉄琴、たいこ、笛、オルガンなどの装飾音を付加するなど人を楽しませることに心血を注いだ。時計の小型化、精度向上同様にオルゴールの世界でも職人達が激しい競争をしたらしい。その後、蓄音機や米国でラジオ放送が始まって、音楽が完全な形で再生されるようになり、さらに第1次世界大戦が勃発するとともに、オルゴール産業は一旦幕を閉じる。僅かに残ったスイスのオルゴールメーカーは小型のオルゴールを作り続けた。戦後三協精機もこのコピーから出発した。どういうものか、米国は昔からオルゴールの消費国で、現在でもサンキョウオルゴールで生産するムーブメントを組み込んだ、人形なり、おもちゃ、ボックスなど最終製品の70%までは米国向けで、欧州向けと日本国内向けはそれぞれ10%に過ぎない。米国ではホームパーティのギフトとしてオルゴールが使われるため、家に5台も6台も所有するという。

一 どの製品が珍品または値打ちのある製品か、素人には判断しにくい。骨董というものはそういうものかも知れないが。

現存するものが少ないだけに、どの作品も素晴らしいといえる。収容する曲の数、音色、人形な

どの面白さ、収納する外箱それに制作された年代などでそれぞれ値打ちは違う。いくつか例を挙げる。オットー社（米国）が制作したキャピタル・カフボックスはくし歯が81弁のシリンダー式に似ているが、仕組みはディスク式。圧縮したコイルばねの反発力を利用するのと、動力源にゼンマイではなく、圧縮したコイルバネの反発力を利用しているのが珍しい。袖口に似たカフという筒に収められた10曲を聴くことができる。ポリフォン社（スイス）のStyle.No.54は、愛称に「ミカド」と日本語で名付けているように、東洋への憧れが伺える作品で、2度の大战により欧州に現存する数は少ない。12枚のディスクを持つシンフォニオンStyleなNo.100も現存するのはこれ1台といわれている。レジーナ社（米国）のレジーナフォンはオルゴールと蓄音機の兼用機。時代の変わり目を象徴しているような作品である。

—現在のオルゴール事情を教えてください。

世界のオルゴール需要は現在、年間9,000万台、ピーク時は1億3,000万台あったと、いわれている。かつては三協精機だけで90%のムーブメントを生産し、国内分をのぞいて東南アジアに輸出した。現地で人形やおもちゃに組み込んでそれぞれ再輸出したが、現在はユンシェン社（中国）とサンキョウオルゴール、それに数多くの中国企業が市場を3分割するかどうかでムーブメントを生産し、外装も中国が多い。

最終商品の消費地は圧倒的に米国が多くて、7割を占め、日本では1割程度が使用されるだけ。日本ではラジオ、テレビ、オーディオなど音源が氾濫しており、オルゴールはかろうじてギフト需要やおもちゃ需要として残っている程度だ。しかし私はオルゴールが役目を終えたとは思っていない。オルゴールの音色は人間の脳によい刺激を与え、リラックスさせて「癒す」効果がある。昔、三協の営業を担当していた時、東京・新橋の事務所に見知らぬお爺さん訪れ、「認知症のバアサンにオルゴール聴かせたい」と頼まれた。「ふるさと」「赤とんぼ」など童謡、唱歌の製品を何台か

譲ってあげたところ、1週間後に再び現われ「口を利かなかったバアサンがオルゴールに合わせて歌ってくれた」と涙ながらに喜んでくれた。癒し効果を全面的に打ち出し、介護や療養、教育の場などでPRしていく。それとオルゴールと口笛、オルゴールとバイオリンなど違った分野とコラボレートすることでいかにオルゴールを楽しく聴かせるか、魅せるか、コンサートの幅を上げていきたい。奏鳴館では、生産地ならではの組立、調整技能を持っており、音の大きさや演奏のスピードなど調整している。本人に最も心地よい音色を提供できるオリジナル商品をつくれればファンは増える。わたしが奏鳴館担当になった時、体験工房のオルゴールの曲数は30曲にすぎなかった。それを600曲近くまで増やした。またショップの商品もこれらの曲と組み合わせる、セミオーダーが出来るように切替えた。お客様は必ず、思い出の曲や好きな曲を持っており、好みの外装に好みの曲をその場でスタッフが組み込んでくれれば、喜んで購入してくれる。校歌や、讃美歌のオルゴールをオリジナルデザインのバッグに組み込んだ「ペーパーバッグオルゴール」商品は卒業記念や生徒勧誘のPR材料として好評だ。

オルゴールに展望がないと思ったこともあるが、奏鳴館で客と直接に接していると感動してくれることも多くて、まだ捨てたものではない。

新技術の開発では、09年に日本商工会議所の「地域資源・全国展開プロジェクト」に新しいオルゴールづくり「世界に一つだけのオルゴール開発事業」が採択された。諏訪地区や県外の技術者が集まってアイデアを出し合い、新しいオルゴール、例えば「建て御柱」に見立てた大時計、80弁ディスクオルゴールの中に座り、音や振動を体感できるBOX、水中で鳴らすオルゴール、102台のオルゴールを一度に合奏させるものなど開発していく。

—体験工房はファン拡大に役立っていますか。

工房では、オルゴールの設計、製作に携わったプロスタッフがわかりやすく指導する。流れは①来館者は好みの曲の18弁ドラムとくし歯を受け取

る ②ドラムをセットし、ハンマーで軸受け部をたたいてカシメ固定し、ゼンマイを入れる ③それにくし歯を当て、良い音が出るように調整しながらネジを締める ④それを気に入った外装にセットし完成する。曲数は600曲あり、外装も10種類以上あり、まさに自分だけのオリジナルオルゴールである。小中学生など若い世代には好評で、将来ファンになってくれると期待している（資料10）。

(資料10)



体験工房では世界でひとつ、自分だけのオルゴール組むことができる。